

『空華集』 訳注

— 七言絶句部 (二) —

(二〇二〇年九月一日受理)

(国語教育講座) 太田 亨

『空華集』は義堂周信(一三二五〜一三八八)が残した作品集である。本稿では、その七言絶句部に所収される作品6〜10番目の訳注を試みる。

五山版『空華集』を底本に用い、元禄九年版『空華集』を校勘に用いる。押韻については、平水韻に従う。

6 寄善福友竹堂

善福の友竹堂に寄す

説禪不必要多徒

禪を説くに必ずしも多徒を要せず

妙舞寧將地編拘

妙舞寧ろ地の編を將て拘らんや

汾水六人成大器

汾水六人 大器と成る

醋酸元不在葫蘆

醋の酸きことは元より葫蘆に在らず

*韻字は、上平声七虞「徒・拘・芦」

【題意】善福寺の竹堂□友に送る。「善福」は相模にある海雲山善福寺のこと。

関東十刹の一つ。義堂自身も貞治五年(一三六六)に善福寺の住持となっており、序25「菊隱歌序」では、善福寺について、「余乏しきに海寺に承く。然れば地は僻にして以て自ら娛しむこと無し」と述べ、僻地であるため自ずと心楽

しむことがないと嘆いている。竹堂□友については、1「題友竹堂行卷」詩に既出。

【現代語訳】

禪を説くのに必ずしも多くの門弟を必要とするわけではない。極上の舞を舞うのに、どうして土地が狭いことなど関係しようか。汾陽善昭の会中のたつたの六人は、熱心な教化によって皆大人物になった(ように住持の指導次第である)。そもそも、酢が酸っぱいことは、もとより看板はなくてもそれが分かるものだ(すぐれた住持の下には、こちらから宣伝等しなくても人は集まってくるのだ)。

【語釈】

【説禪】禪の道を説く。蘇軾「贈黃山人」詩に「説禪長笑老浮圖」(禪を説くに長く老浮図と笑ふ)とある。

【不必要多徒】必ずしも多く門徒を必要とするわけではない。「不必」は、「かならずシモくセズ」と読み、必ずしもくとするわけではない。部分否定。「多徒」は、多くの門弟。竹堂□友の下に参集する僧の多寡について言う。

【妙舞】たえなる舞い。極めて上手な舞の手。杜甫は「觀公孫大娘弟子舞劍器行」詩に「妙舞此曲神揚揚」(此の曲に妙舞して神揚揚たり)と詠むほか、「陪

王侍御同登東山最高頂宴姚通泉晚攜酒泛江」詩にも「妙舞逶迤夜未休」(妙舞は逶迤として夜にも未だ休まず)と詠んでいる。

【寧將地編拘】「寧將く……」は、「むしろ(なんぞ)くフもつて：ンヤ」と読み、どうして(を)……しようか、いやしない(反語)。類似的表現に、中巖圓月の「和答鈍夫快禪會侍月江於道場其二」に「世事如風馬、寧將朽索調」(世事は風馬の如くして、寧ろ朽索を將て調へんや)とあり、同じく中巖の「答充太虚其一」に「責己重周輕待人、寧將土苴忽其身」(己を責むること重く周ねく人を待つこと軽くす、寧ろ土苴を將て其の身を忽かにせんや)とある。

【地編】土地が狭いこと。土地の広狭と舞の関係を詠んだものとして、黄庭堅「次韻幾復和答所寄」詩に「地編未堪長袖舞」(地編にして未だ長袖の舞に堪へず)とあり、一韓智翊の抄に「地――注、景帝ノ子タチニマイ舞テ、我ニ酒クレヨト云ハレタニ、長沙王ハ我カ国力セハイト云テ、ソト舞ソ。黄幾――モ此間マテ四會縣ノ小処ニイタホトニ、長袖テ舞コトモナイソ」と抄する。この典拠となった『漢書』卷五十三「長沙定王伝」には、應劭注に「景帝後二年、諸王來朝。有詔更前稱籌歌舞。定王但張襖小舉手。左右笑其拙。上怪問之。對曰、臣國小地狹、不足回旋」(景帝の後二年に、諸王來朝す。詔有りて更ごも前みて稱籌して歌舞す。定王但だ襖を張り小しく手を挙ぐ。左右其の拙なるを笑ふ。上怪しみて之を問ふ。對へて曰はく、臣の國小にして地狭ければ、回旋するに足らず、と)とあり、舞うことが土地が狭いことによつて制限されるとある。本詩の「妙舞」は、土地が狭かろうと広かろうと関係が無い。

【汾水六人成大器】汾陽善昭の会中には大士(仏語。すぐれた人)六人が修行中であったが、師の汾陽は寒さが厳しいので夜參を中止したところ、異形の比丘に咎められたことに発憤し、一偈を作り、六人を必ずや大器と成すことを詠んだ。土地柄、徒弟の多寡、氣候の寒暖に関係なく夜參・徒弟の接化につとめた機縁を述べた故事。『五灯会元』卷十一「汾陽善昭禪師伝」に、「師為并汾苦

寒、乃罷夜參。有異比丘振錫而至、謂師曰、會中有大士六人。奈何不說法。言訖而去。師密記、以偈曰、胡僧金錫光、為法到汾陽。六人成大器、勸請為敷揚」(師并汾の苦寒なるが為に、乃ち夜參を罷む。異比丘の錫を振るひて至る有り、師に謂ひて曰はく、會中に大士六人有り。奈何ぞ說法せざる、と。言ひ訖りて去る。師密に記し、偈を以て曰はく、胡僧金錫の光、法が為に汾陽に到る。六人を大器と成し、勸請して為に敷揚せしむ、と)とある。

【醋酸元不在葫蘆】酢が酸っぱければ、もとより看板はなくてもそれが分かる。「醋酸」は、酢が酸っぱいこと。「元不在」は、もとよりのない。「葫蘆」は、ひょうたん。ふくべ。酢の店の看板。虚堂智愚の「万寿寺後録」(『虚堂和尚語録』卷九)に、「僧云、徳山小參答話、有問話者三十棒。此意如何。師云、醋酸何必挂葫蘆」(僧云はく、徳山小參答話せず、問話の者有らば三十棒、と。此意如何、と。師云はく、醋酸ければ何ぞ必ずしも葫蘆を挂けん、と)とあり、酢が酸いければ看板はかけずとも買いに來ることを言う。月江正印の「贈見西堂參春雨菴頭老和尚」(『貞和類聚祖苑聯芳集』師弟部所収)詩に、「酒美豈拘深巷陌、醋酸不在大葫蘆」(酒美きこと豈に深巷陌に拘はらんや、醋酸きこと大葫蘆に在らず)とある。「醋」は「酢」と同字であり、酒をさらに発酵させて「酢」とした。「酢」の店とは、本朝の酒屋のことを指すか。

【奈箇】善福寺の開山は仏源派の大川道通(大休正念―大川)である。善福寺に關わつた人物として、鉄庵道生(一二六二―一三三一)は、肯山聞悟(蘭溪道隆―若訥宏弁―石庵旨明―肯山)が住する際の山門疏を製している。

義堂は、貞治五年(一二三六)五月二十二日に、足利基氏の命による公帖を受け、六月一日に善福寺に入院している。その時の衣鉢侍者は絶海中津であった(『日工集』)。義堂は善福寺に住するや庭に菊を植えている(序25「菊隱歌序」)。僻地ではあったが、多くの僧が義堂に詩軸の序を求めて訪れたようである(序17「贈寶山玖侍者歸常州詩序」・序18「送忠義天歸伊陽曹源詩軸跋」)。また、

義堂は、善福寺住持を勤めていた貞治五年の冬に、京都を往来している（七絶435「丙午冬暫出海雲游京師有作」・序19「送無盡用侍者歸筑州省師慧林寺稱如意寶珠山」・序50「玉岡唱和詩序」）。翌六年になると、三月十六日に、下總の花嶋に隠れていた大杭慈船（寂庵上昭—龍山徳見—大杭）と住持職を交代することを願い出ている。これは大杭が龍山徳見より法を嗣いでおり、義堂が京都で龍山より恩義を受けたことに報いるためであった（『日工集』）。

その後、応安二年（一三六九）五月には玉岡蔵珍（虚谷希陵—別伝妙胤—玉岡）が善福寺の住持となり（『日工集』）、時期は不明であるが、心巖周己（夢窓疎石—心巖。？—一三九八）が住している（七絶496「送曦侍者省善福心巖」・七絶497「次韻心巖寄題善福方丈」）。

詩の構成に目を向けると、第一句と第三句は、寺で修行する人数の多寡が師の優劣に関係ないとする意で連関しており、第二句と第四句は、土地が辺鄙であるうと師が立派であれば関係ないとする意で連関している。第二句から第四句にかけて、それぞれの句に比喻を用いて、自身の意を託して詠じており（機縁の法）、禪詩としての工夫を凝らしている。

7 送察沙彌登壇受戒 察沙彌の登壇受戒するを送る

臘高可怕居人上 臘高くして人の上に居ることを怕るべし

年少寧嫌受戒遲 年少くして寧ろ受戒の遅きを嫌はんや

不見藥山老尊宿 見ずや 薬山の老尊宿

一生自肯做沙彌 一生 自ら肯へて沙彌と做すを

*韻字は、上平声四支「遲・彌」

【題意】 察沙彌が戒壇に登って師より仏戒を受けるのを送る。「察」は、仲明□

察のこと。「沙彌」は、出家して十戒を受けた男子で、具足戒を受けて比丘となるまでの間の者。『釋氏要覽』上「剃髮」には、「沙彌、此に始めて落髮して後の称谓なり」とある。「登壇受戒」は、戒壇に登って仏戒を受ける意で、正規の手続きにより受戒したことを示す。戒法を受け、これをたもつことができれば仏の位に入ることができる。戒法には、五戒・十戒・四十八戒・二百五十戒などがあり、曹洞宗は三帰戒・三聚浄戒・十重禁戒を合し十六条戒を受ける。「登壇受戒」について、義堂は、五律124「和皎然詩送中竺道者赴叡山受戒并序」で、「永和丙辰二月、小師中竺季十三。以道者、自福山、將赴比叡山、登壇受戒也」（永和丙辰二月、小師中竺は季十三。道者を以て、福山より、將に比叡山に赴き、登壇受戒せんとす）と、十三歳の中竺道者が戒壇に登って仏の戒を受けるために比叡山に赴くことを述べ、「夫登壇受戒、寔佛祖之權輿、禪智之基本也」（夫れ登壇受戒は、寔に佛祖の權輿にして、禪智の基本なり）と、登壇受戒の重要性を説いている。

察沙彌は、後に道号「仲明」を与えられる。明の天界寺に住する季潭宗泐が八分（篆書）で揮毫した「仲明」を至宝とし、その字説を義堂に求めている（説84「仲明説」）。また、永和元年（乙卯・一三七五）、伊予の宗昌寺に住する本師の月菴宗光のもとへ帰省するに際し、若干の禅僧が詩を贈っており、十一年後（乙丑）にそれらを一軸に編集して序を同里の義堂に求めている（序114「贈察仲明歸省本師頌軸序」）。義堂と里を同じくするということは、仲明□察の出身が土佐であったことが分かる。そのためか義堂は、仲明が母を訪ねるに際し、諸友が詠んだ送別詩を選定するように叔衡覚権から頼まれた時、故郷から離れて四十年、母と二十三年会っていないことを恥じている（序115「書送仲明省母詩後」）。

【現代語訳】 具足戒を受けて法臘ばかりを重ね、徒らに人の上にいるのは恐るべきことであり、まだ年齢が若いのに仏の戒法を受けるのが遅くなったと嫌が

ることがあるか(全く嫌がらなくて良いことだ)。あの薬山惟儼の年老いた有徳の弟子である高沙弥は、一生自ら進んで沙弥の位に甘んじたという逸話をどうして見ないのか(是非とも見なさい)。

語釈

【臘高】戒法を受けて後、修行の年数が多いことをいう。「臘」は法臘で、具足戒を受け手から過ごした安居の数をいう。『正法眼蔵』『行持』に「百丈禪師、ステ二年老臘高ナリ。ナホ普請作務ノトコロニ、壯齡ト同勵カス。衆コレヲイタム。人コレヲアハレム。師ヤマサルナリ。ツヒニ作務ノトキ、作務ノ具ヲカクシテ、師ニアタヘサリシカハ、師ソノ日、一日不食ナリ。衆ノ作務ニクハハラサルコトヲウラムル意旨ナリ。コレヲ百丈ノ一日不作、一日不食ノアトトイフ」とあり、臘が積み重なり、人の上に立つようになると、周りから遠慮されたり煙たがられるようになる。

【可怕居人上】身を人の上に置くことをおそれた方が良い。「可怕」は、おそれられた方が良い。義堂の七絶¹¹⁵「庭前櫻花未開戲答友人」詩に、「可怕含羞白晝開」(羞を含みて白晝に開くを怕るべし)とある。「居人上」は、人の上に立つこと。

【寧嫌受戒遅】どうして仏の戒を受けることが遅くなるのを嫌がるのか、嫌がることはない。「寧嫌」は、「むしろ(なんぞ)くを嫌はんや」と読み、どうしてくを嫌がるのか、嫌がることはない(反語)。義堂の七律³⁸⁸「寄金剛郁元章」詩に、「有生可度寧嫌濁」(生の度すべき有りて寧ろ濁を嫌はんや)とある。

【受戒】は仏門に入り、仏の戒を受けることを言い、『正法眼蔵』『受戒』には、「西天東地、仏祖相伝シキタレトコロ、カナラス入法ノ最初ニ受戒アリ、戒ヲウケサレハ、イマダ諸仏ノ弟子ニアラス、祖師ノ児孫ニアラサルナリ。離過防非ヲ参禅問道トセルガユエナリ」とある。

【不見】どうして見ないのか。「君見ずや」「豈に見ずや」と同じ。類似の表現

に、杜甫「秋笛」詩に、「不見秋雲動、悲風稍稍飛」(見ずや秋雲動き、悲風稍稍に飛ぶを)とある。

【薬山老尊宿】「薬山」は、薬山惟儼(七四五〜八二八)のこと。「尊宿」は、年老いた徳の高い僧。ここでは高沙弥を指す。

【一生自肯做沙彌】薬山惟儼の弟子である高沙弥が一生涯沙弥であったことをいう。『五灯会元』卷五「澧州高沙彌伝」には、「山曰、何處去。師曰、江陵受戒去。山曰、受戒圖甚麼。師曰、圖免生死。山曰、有一人、不受戒、亦無生死可免。汝還知否。師曰、恁麼則佛戒何用。山曰、這沙彌猶挂唇齒在。師禮拜而退。：(中略)：山曰、生死事大。何不受戒去。師曰、知是般事便休。更喚甚麼作戒」(山曰はく、何れの処にか去る、と。師曰はく、江陵に戒を受け去らん、と。山曰はく、戒を受けて甚麼をか図る、と。師曰はく、生死を免ることを図る、と。山曰はく、一人有り、戒を受けず、亦た生死の免るべき無し。汝還た知るや否や、と。師曰はく、恁麼ならば則ち仏戒は何ぞ用ひん、と。山曰はく、這の沙彌は猶ほ唇齒に挂くること有り、と。師礼拝して退く。：(中略)：山曰はく、生死事大なり。何ぞ戒を受けて去らざる、と。師曰はく、是の般の事を知らば便ち休す。更に甚麼を喚びて戒と作さん、と)とあり、山・薬山との受戒をめぐる問答において、師・高沙弥がその意義を見出せなかったことが描かれている。道元は、『正法眼蔵』『受戒』に、「コノ受戒ノ儀、カナラス佛祖正傳セリ。丹霞天然、薬山ノ高沙彌等、オナシク受持シキタレリ。比丘戒ヲウケサル祖師アレトモ、此ノ佛祖正傳菩薩戒ヲウケサル祖師、イマタアラス。カナラス受持スルナリ」と述べ、高沙弥は比丘戒は受けなかったが、菩薩戒は受けたと提唱する。「自肯」は、みずから無理にくする。『碧巖録』四一則の本則評唱に、「言鋒若差、郷關萬里。直須懸崖撒手、自肯承當」(言鋒若し差はば、郷關は萬里なり。直だ須く懸崖より手を撒し、自ら肯て承當すべし)とある。

余滴 七絶⁸⁹⁹ 「贈周三頭陀受戒東歸并序」によれば、往昔日本に壇を置いて受戒できる場所は、筑後の観音寺・大和の東大寺・下野の薬師寺の三カ所であり、後に薬師寺が廃れ、延暦寺で行われるようになった。若年僧が受戒のために当地への遠路を往来するのは、相当な辛苦を伴うものであった。義堂自身は、『日工集』によれば、暦応二年（一二三九）、十五歳の時に天台山（比叡山延暦寺）で登壇受戒している。

仲明□察の師は、月庵宗光である（南浦紹明―大蟲全岑―月庵―仲明）。義堂は、仲明が伊予の宗昌寺に住する月庵のもとを訪れるのに際して送別詩を詠んでいるが、義堂が夢窓派であるのに対し、月庵は大応派である。門派を超えた交流がなされていたようである。仲明は、故郷の土佐から伊予の月庵のもとをおとずれ、月庵を本師とした。その後、月庵は仲明を鎌倉の義堂のもとに預けたのではあるまいか。

仲明と交流した僧は多い。絶海仲津（二三三六―四〇五）は、「和察侍者韻」（『蕉堅稿』所収）詩に「故国 帰り来りて故人少なし」と詠んでいる。絶海は渡明し、季潭宗渤のもとで学んでいることから、季潭揮毫「仲明」を持ち帰ったのは絶海ではなからうか。また絶海法嗣の鄂隠慧歳（一三六六―一四二五）は、「送察侍者遊五台歸補陀名山」（『南游稿』）詩を詠んでおり、仲明が故郷土佐の五台山を訪れた後に阿波の補陀寺に帰るのを送っている。惟忠通恕（一二四九―一四二九）は諸友とともに、仲明が故郷の親を訪ねるに際して「送仲明察侍者省親」（『雲壑猿吟』）詩を詠んでおり、それらの詩を義堂が選定している。

8 聞雷戯作 かみなり 雷を聞きて戯れに作る
 聽得春天雷一聲 き 聽き得たり しゅんてん 春天の雷 いっせ 一声

知它號令爲誰行 た 它的號令誰が為に行はるるかを知る
 相陽城外泥溝裡 さうやうじやうくわい 相陽城外泥溝の裡
 驚起蝦蟆努眼睛 きやうき 驚起の蝦蟆 がんせい 眼睛を努らす
 *韻字は、下平声八庚「聲・行・晴」

題意 雷を聞いて戯れに作った詩。

現代語訳 春の空に大きな雷鳴一声が我が耳に響き渡った。やがて、その雷様の号令が誰のために行われたのが分かった。それは相陽・鎌倉の町はずれの泥深い溝の中、驚き起こされたヒキガエルが、怒りで目を見張らせている。

語釈

【聽得】耳に入る、聞こえる。西巖了慧「送僧之中川」（『江湖風月集』所収）に、「龍湫雲冷不成眠、聽得樵歌一曲全」（龍湫雲冷たくして眠るを成さず、樵歌一曲を聴き得て全し）とある。また袁幼之「遊双林寺」（『中華若木詩』・『統錦繡段』所収）に「林間聽得僧相語、未有詩人不愛山」（林間聴き得たり僧の相語るに、未だ詩人の山を愛せざること有らずと）とある。

【春天雷一聲】春の空に雷の一声が鳴り響く。元稹「芳樹」詩に、「春雷一聲發、驚燕亦驚虵。清池養神祭、已復長蝦蟆」（春雷一声発し、燕を驚かし亦虵を驚かす。清池に神祭を養ひ、已に復た蝦蟆を長ぜしむ）とある。春雷は、三月から五月頃にかけて、寒冷前線の通過時に発生する。春の到来を伝える雷とも言われ、雷鳴に驚いて冬眠中の虫たちが目覚めるとの理由から、「虫出しの雷」と言われることもある。また雷は、千山栄「聞雷」詩が「貞和類聚祖苑聯芳集」の「悟道」部に所収されるように、開悟の契機となる場合も存する。

【它號令】「它」は、あの、その。ここでは義堂が聞いた雷を指す。「號令」は、呼び叫んで指令する、大声で命令する。雷は天の号令であるとされていた。『後漢書』郎顛襄楷列伝第二十に、「大人者、與天地合其德、與日月合其明、璇璣

動作、與天相應。雷者號令、其德生養。號令殆廢、當生而殺、則雷反作、其時無歲」(大人なる者は、天地と其の徳を合はせ、日月と其の明を合はす、璇璣の動作は、天と相應ず。雷なる者は號令にして、其の徳は生養なり。號令殆ど廢し、當に生かすべくして殺さば、則ち雷反りて作し、其の時歳無し)とあり、雷は号令であつて、その徳が万物を生育させるも、号令がなければ、逆にその年の実りがないとする。義堂は銘53「武州寶陀山圓勝禪院新鑄鐘銘」に、「維天號令、雷以爲宣。維佛演法、鐘以爲先」(維れ天の号令は、雷以つて宣を為す。維れ佛の演法は、鐘以つて先と為す)という。

【爲誰行】誰のために行われるというのか。類似の表現として、『碧巖録』五則の頌に「百花春至爲誰開」(百花春至りて誰が為にか開く)とある。

【相陽城外】鎌倉の町外れ。「相陽」は、相模の南。鎌倉一帯を指す。「城」は、町のこと。杜甫「春望」詩の「城春にして草木深し」の「城」と同意。義堂は、『日工集』応安三年九月二〇日の条に、「廿日、大風俄作、人畜驚散。余急叫僧奴、作防風之計。相陽城中、鎌倉諸谷、無一不破壞摧折者、土人壓死者、往々有焉」(廿日、大風俄かに作り、人畜驚き散ず。余急ぎて僧奴を叫び、防風の計を作す。相陽城中、鎌倉の諸谷は、一として破壞摧折せざる者無く、土人の壓死する者、往々有り)と言ひ、鎌倉の町が大風によつて大きな被害を得たことを述べている。また序38「招魯山齊上人詩敘」では、「且夫相陽蓋古之霸國也」(且つ夫れ相陽は蓋し古の霸國なり)と指摘している。

【泥溝裡】泥深い溝のなか。韓愈「寄崔二十六立之」詩に、「汝脚有索縻、踏身泥溝間」(汝が脚に索縻有り、身を泥溝の間に踏む)とある。七絶452「逐蛙」詩に、「好去泥溝汚流底、年年蝌蚪長兒孫」(好し泥溝汚流の底に去りて、年年蝌蚪 兒孫を長ぜよ)とある。

【驚起】驚き起こす。劉禹錫「浪淘沙詞」(『聯珠詩格』所収)に、「無端陌上狂風急、驚起鴛鴦出浪花」(無端の陌上狂風急なれば、驚起の鴛鴦 浪花より

出づ)とある。義堂は、『五灯会元』卷六「澧州洛浦山元安禪師」に、「師曰、天上忽雷驚宇宙、井底蝦蟇不舉頭」(師曰はく、天上の忽雷は宇宙を驚かすも、井底の蝦蟇は頭を挙げず、と)に拠り、天上の忽雷にも驚かない井底の蝦蟇のように、師の聲が響かない弟子を想起したか。

【蝦蟇】蝦蟇。ひきがえる。

【努眼睛】怒つて目を見張る。『事文類集後集』卷五十一「問蛙喜怒」に、「龍問蛙曰、汝之喜怒何如。曰、吾之喜、則清風明月、一部鼓吹。怒則先之以努眼、次之以腹脹、然至於脹過而休」(龍蛙に問ひて曰はく、汝の喜怒は何如、と。曰はく、吾の喜ばば、則ち清風明月に、一部に鼓吹す。怒れば則ち之に先んじて以て眼を努らせ、之に次ぎて以て腹脹らす。然して脹らせ過ぐるに至りて休む)とあり、蛙が怒つた時に目を見張るとする。『五灯会元』卷十六「洪州法昌倚遇禪師」に、「師曰、恁麼則臨崖看澹眼、特地一場愁。英曰、深沙努眼睛」(師曰はく、恁麼ならば則ち崖に臨みて澹眼を看るは、特地一場の愁ならん、と。英曰はく、深沙 眼睛を努らす、と)とある。

【余適】春が到来し、万物の生育を促すにあたり、その号令とも言えるものが雷なのである。雷の号令に従つて目を覚ましたのは蛙である。起こされた蛙は当然怒つて目をつり上げるが、このような蛙を知っているのは、世間広しといえども他ならぬ自分(義堂)だけだという子供っぽい得意氣が窺われる。「戯作」と題した所以である。義堂のユーモアがあふれた作品といえる。

9 戲和患眼答了義田 戲れに眼を患ふに和して了義田に答ふ
見説逢春患眩眸 見るならく春に逢ひて眩眸を患ふを
知君對境懶擡頭 知んぬ君が境に對して頭を擡ぐるに懶きことを
早明色即是空意 早に明らむ色即是空の意

花在霧中看莫愁 花は霧中に在りて見て愁ふること莫し
 *韻字は、下平声十一尤「眸・頭・愁」

題意 戯れに目を病んだことに合わせて、義田□了に答える。「戯和」は、ふざけて合わせる、の意。相手の詩韻に合わせることもあるが、ここでは義堂が「眼を患った」ことに掛け合わせている（張籍に「患眼」詩『三体詩』所収）があるが、和韻していない。

義堂は目を病んでおり、作品中にしばしば目の不調を訴えている。詩題にそのことが表れている作品だけでも、七絶22「患眼次韻答蔭大樹見問」・七絶46「題水月軒目患二首」・七絶111「人日患目不赴詩筵戲作謝之」がある。

「了義田」は、義田□了。詳細は不明。『日工集』応安二年（一三六九）十月三日の条に「是の日、余石屏に在り。義田（□了）・東谷（□照）諸公来り話す、話叢林の弊に及ぶ。余曰はく、今時の兄弟老宿に依らず。是を以て往々節を失ひ、器を成さざる者之れ有り。慎しむべし。且つ蓋し兵器にて自ら防ぐ。是れ乃ち自防に非ずして、即ち自ら賊ひ自ら傷るなり。古人兵有るは是れ凶器の戒、之を思はざるべけんや、と」とあり、当時の禅林内における風紀の乱れについて話談している。『空華集』には、七絶19「戲以京筆寄了義田」・七絶116「甲辰上巳次韻戲答了義田二首」・七絶118「連和前韻三首謝義田訪」・七絶278「紀夢一首奉戲義田上人。兼簡東谷無依雲嶽三友」・七絶289「追和大喜和尚韻。賀義田首座住平田精舍。兼戲九峯三首」・七律148「次韻答義田了藏主」が詠まれている。本詩を含めて19・116・278には詩題に「戯」字が詠まれており、義田が義堂と親密な仲であったことが窺われる。また289より、遠江の平田寺（現静岡岡原郡）に住したことが分かる。

現代語訳 見ておわかりのように、春になって目をくらす病を患ってしまった。そうして知ったのは、あなたがあらゆる事象に対して、自分の内奥に秘め

たものを考えや思いとして浮かべることにもものぐさになってしまったこと。それに対して、私は早くより色即是空の極意を明らかにしているので、眼を患って霧の中に舞い散る花を見ても、思い苦しむことがないのだよ。

語釈

【見説】見る、見るところによれば。「みるならく」と読む。李白「送友人入蜀」詩に「見説蠶叢路、崎嶇不易行」（見るならく蠶叢の路、崎嶇として行くこと易からず）とある。

【逢春】春に逢う。杜甫「絶句漫興其四」詩に、「二月已破三月來、漸老逢春能幾回」（二月已に破れて三月來る、漸老 春に逢ふこと能く幾回ぞ）とある。

【患眩眸】めをくらす病をわずらう。「眩」は、くらむ、目まいする。「眸」は、目、ひとみ。杜甫「龍門閣」詩に「目眩隕雜花、頭風吹過雨」（目眩みて雜花隕ち、頭風して過雨吹く）とある。義堂は、七絶50「鹿苑方丈窓前牡丹花戲次一無二韻而詠之」詩で「何事看花眩粉粧」（何事ぞ花を看て粉粧に眩まん）と詠じ、七絶575「走筆題諸友木假山詩後」詩で「病夫目眩不堪攀」（病夫 目眩みて攀づるに堪へず）と詠じ、七絶650「因看大般若經值雪作偈示衆曰」詩で「山僧眼眩春來甚、例作空華一樣看」（山僧 眼眩みて春來ること甚し、例へて空華一樣の看と作す）と詠じている。目まいがしたり、目の前がぼんやりして暗くなることがあったようである。また、序74「送實際穩上人歸京詩敘」や説49「天麟說贈岸侍者歸京南禪」では、序や説を求めてきたのに対し、「眩疾」を理由に一度その依頼を断っている。

【對境】あらゆる心識の事物対象に対する。『五灯会元』卷七「玄沙師備禪師」には、「必須對塵對境、如枯木寒灰、臨時應用、不失其宜」（必ず須く塵に對し境に對し、枯木寒灰の如くし、時に臨んで應用し、其の宜しきを失はざるべし）とある。

【懶擡頭】内に秘めたものが考えや思いとして浮かぶことをおこたる。「懶」

は、おこたる、なまける、ものぐさなさま。雪峰慧空「送白兄歸豫章」(『雪峯空和尚外集』)に、「我今懶説偈、汝亦莫言別」(我今偈を説くことに懶く、汝も亦別れを言ふ莫かれ)とある。「擡頭」は、頭をもたげる。隠れていたこと、押さえていたことが、考えや思いに浮かぶさま。「三玄三要」に対する「慈明頌」(『人天眼目』巻一)には、「第一要、豈話聖賢妙。擬議涉長途、擡頭已顛倒」(第一要、豈に聖賢の妙を話さんや。擬議すれば長途に涉り、頭を擡ぐれば已に顛倒す)とある。また雪峰慧空「送宜川」(『雪峯空和尚外集』)には、「擡頭三世才曉昏、過眼千差孰妍醜」(頭を擡ぐれば三世才かに曉昏たらん、眼を過ぐれば千差孰か妍醜ならん)とある。

【早明】つとに明らかにする。「明」の類似の表現について、『碧巖録』九則の本則評唱に、「不知古人方便門中、為初機後學、未明心地、未見本性、不得已而立箇方便語句」(知らず古人方便門の中、初機後學の、未だ心地を明らめず、未だ本性を見ざるが為に、已むを得ずして、箇の方便の語句を立することを)とある。

【色即是空意】色とは形あるもの、空とは実体のないこと、全てのものは互いに関係し合っているもので、そのものとして存することは何一つないことの意味。『般若心経』に「色不異空、空不異色。色即是空、空即是色」(色は空に異ならず、空は色に異ならず。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり)とある。義堂は、七絶50「鹿苑方丈窓前牡丹花戲次一無二韻而詠之」で、「色即是空空即色、憑將此話問空王」(色は即ち是れ空、空は即ち色、憑りて此の話を將て空王に問ふ)という。

【花在霧中看莫愁】花が霧の中にあるのを見るときも愁うことはない。「花在霧中看」は、杜甫「小寒食舟中作」詩に「春水船如天上坐、老年花似霧中看」(春水 船は天上に坐するが如く、老年 花は霧中に看るに似たり)とあり、老いた杜甫の目に花が霧の中で散っているように見えることを想起している。「莫

愁」は、苦しむことがなくなる。実際に存在しないはずの花があたかも花としてみえるのは、煩惱にとらわれた人が実在しないものにとらわれるのと同じである。本来は現象世界のすべての事象が実体のないものであることに気付くことを義田□了にうながしている。

【余適】結句に見える「霧中の花」は、本来見えない花が見えることを言い、「空華」に通じる。中巖圓月は『空華集』の序に、「己が能くする所の功を以て、自ら伐ることを為さざるなり。惟に自ら伐らざるのみに非ず、之を視れば、空華の病目に翳むが如し。故に乃の集に目して空華と曰ふ」と述べている。義堂は、自分の功である作品を誇ることなく、さらに自己の作品があたかも空中の花が病の目にかすむがごとき存在で、本来は無いものだ謙遜するところから、『空華集』と名付けたとする。義堂が目患ったことで見える空中の花は、自身の存在・作品の価値をも表しうる存在だったのである。

寺田透氏は『義堂周信・絶海中津』(筑摩書房・日本詩人選24)で、本詩について「眼病の症状の一つを手がかりとして大悟を説き、同様の僧の未悟をかからかふこの七言絶句に現れた調子は、厳しく見れば禅の日常性への頹落を感じさせ、それだけですですに好ましくない」と評する。当時期の詩風からの判断・評価は現状では不可能である。しかし、義田という親しい間柄の僧に、自己の「患眼」の体験を利用して得悟のことを「戯れ」に説示することに、筆者としては、義堂の義田に対する特別の思い入れ、親愛の情を見て取ることができる。

10 詠湯瓶 湯瓶を詠ず

滿腹清冷俗不直 腹を清冷に満たすは俗に宜ならず
 供僧煮茗好提持 僧に茗を煮るを供するに提持すること好し
 雖然火底甘煩惱 然りと雖も火底煩惱に甘んず

也勝危身在井澗 也た身を危くして井の澗りに在るに勝れり
 *韻字は、上平声四支「宜・持・澗」

【題意】お湯を沸かす瓶について詠んだ詩。茶の文化が広まったことにより、湯を沸かすための「湯瓶」は重宝された。

【現代語訳】お腹を清冷の水で満たすことは、俗世間では良くないこととされている。そこで僧に茶を煎じてすすめるのだが、自分（瓶）は持ち運びにはもってこいである。そうはいっても底はおいしい茶を飲みたいという欲望の炎に我慢することになる。まあそれでも身を危険にさらして井戸のほとりに置かれるよりはましである。

【語釈】

【満腹清冷】腹を水で満たすこと。「満腹」は、腹を満たす。杜甫「写懷二首其一」詩に、「古者三皇前、満腹志願畢」（古者三皇の前、腹を満たせば志願畢る）とある。「清冷」は、清らかに透きとおっている水。介石智朋禪師「惠山煎茶」（『江湖風月集』所収）詩に、「瓦瓶破曉汲清冷、石鼎移來壞砌烹」（瓦瓶 曉を破りて清冷を汲み、石鼎 移し來りて壞砌に烹る）とあり、新編江湖風月略註抄に「未夕曉ナラ又先ニ清冷ヲ汲ムソ。水ハ宵イト又夜曉テトハ悪ヒホトニ、曉ナラヌニ汲ム也」とある。

【俗不宣】世間一般に宜しくない。「俗」は、世の中、つね。「宣」は、よろしい、もつともである。韓愈「海水」詩に、「風波亦常事、鱗魚自不宣」（風波亦た常事、鱗魚 自ら宜ならず）とある。

【供僧煮茗】僧に煎茶をすすめる。「供」は、ささげる、すすめる。「煮茗」は、茶を煎じる、煎茶。黄庭堅「常父答詩、有煎點徑須煩緑珠之句。復次韻戲答」詩に、「欲買娉婷供煮茗、我無一斛明月珠」（娉婷を買ひて茗を煮るを供せんと欲すれども、我に一斛の明月珠無し）とある。また韓子蒼「謝人惠茶」（『続錦

繡段鈔』所収）詩に、「白髮前朝舊史官、風爐煮茗暮江寒」（白髮 前朝 舊史官、風爐 茗を煮て暮江寒し）とある。

【好提持】さげもつのにちょうど良い。「提持」は、さげもつ。了菴清欲「析天童平石二偈送言侍者再參」（『貞和類聚祖苑聯芳集』送行部所収）に、「天寒歲晚重逢月、正好提持折脚鐘」（天寒く歳晚重ねて月に逢ひ、折脚鐘を提持すること正に好し）とある。

【雖然】そうであるけれども。

【火底】直接火に当たる瓶の底の部分をいう。現在でも、茶道具の一つである茶湯釜の底のことを「火底」といい、「火受け」ともいう。

【甘煩惱】心を迷わす欲望にあきらめる。「甘」は仕方がないとあきらめ心静かに堪え忍ぶ、満足する。「煩惱」は、心身を悩まし苦しめ、煩わせ、汚す精神作用。心身を迷わす欲望、心の迷い。『碧巖録』八〇則の本則評唱に、「第七識末那識、能去執持世間一切影事、令人煩惱、不得自由自在。皆是第七識」（第七識の末那識、能く去りて世間一切の影事を執持して、人をして煩惱して、自由自在を得ざらしむ。皆な是れ第七識なり）とあり、『万安抄』に「七識ハ業転現ノ三細ニハ転ノ位也。然レハ妄ノ体顯、故ニ我知我見我愛我慢ノ四煩惱力於此生シテ障碍スル也。故ニ不得自由也」とある。また『臨濟録』「示衆」に、「煩惱由心故有、無心煩惱何拘」（煩惱は心に由るが故に有なり、無心ならば煩惱何ぞ拘はらん）とある。

【也勝危身在井澗】またその身を危険にさらして井戸のそばに置いておくより勝っている。「也」は、また。「勝く」は、くよりまさっている、すぐれている。

断江覚恩「澗山方丈寒夜與印廷用然竹枝」（『貞和類聚祖苑聯芳集』燈燭柴炭部所収）に、「誰知竹尊者、也勝木如來」（誰か知る 竹尊者、也た木如來より勝れり）とある。「危身」は、身を危うくする。身を危ういところに置いて、禍患を避けない。「在井澗」は、井戸のそばにある。揚雄「酒箴」（『漢書』卷九

十二「游侠傳第六十二」所収)に、「黄門郎揚雄作酒箴、以諷諫成帝。其文為酒客難法度士、譬之於物。曰、子猶瓶矣。觀瓶之居、居井之眉、處高臨深、動常近危」(黄門郎揚雄酒箴を作し、以て成帝を諷諫す。其の文は酒客の法度の士を難ぜんが為に、之を物に譬ふ。曰く、子は猶ほ瓶のごとし。瓶の居を觀るに、井の眉りに居り、高きに處り深きを臨み、動もすれば常に危ふきに近づく)とあり、酒を飲まない法度の士を非難して、井戸のそばにある瓶のように少しでも動けば危険であることに譬えている。蘇軾「偶與客飲、孔常父見訪、方設席延請、忽上馬馳去、已而有詩。戲用其韻答之」詩に、「揚雄他文皆不奇、獨稱觀瓶居井湄」(揚雄が他文は皆奇ならず、独り瓶の井の湄りに居するを觀るを称す)とあり、一韓の抄(『四河入海』所収)に、「坡此二句ノ言ハ、揚雄不飲者ノ法度士ヲ難シテ、是ヲ瓶ノ井ノ湄ニ居シテ、処高臨深、動常近危ニ譬テ云ソ。酒ヲ飲テ、活計ニ法度ニ不拘シテアルコソヨケレ」とある。

余滴 榮西(一一四一〜一二一五)は、二度の渡宋を経験し、日本に禅宗を伝えたが、二度目の渡宋では、茶の種を持ち帰り、茶の文化を禅林に広める契機をなした。当初の茶の効能は、眠気を覚まし、氣のふさを晴らすなど、学ぶことに専心するためであった。やがて、広く浸透するにいたり、茶を喫しながら談義することが頻繁に行われるようになった。義堂自身も茶を嗜み、多くの茶詩を詠じている。禅僧の茶詩の表現における特徴については、拙稿「日本中世禅林文学における茶に関わる典故表現について」(『白居易研究年報』第十八号・二〇一七)を参照。

禅林において広範に喫茶が普及したために、茶を煮るための湯瓶が重宝された。偈頌の総集『貞和類聚祖苑聯芳集』にも、希叟紹曇と斷崖了義が「湯瓶」(器用樂器部所収)詩を詠じている。本詩は、揚雄の「酒箴」を典故に用いながら、湯瓶を主語として詠んでおり、擬人法が用いられている。煮茗のための

湯瓶になりきった義堂のユーモアが看取される。